

G活動で浜の元気を取り戻そう ～白浜浦女性部の復興への取組～

釜石湾漁業協同組合 白浜浦女性部
部長 佐々木 淳子

1. 地域の概要

岩手県釜石市は、三陸復興国立公園のほぼ中央に位置しており、古くから製鉄の町として、また、世界有数の漁場である三陸漁場の重要な漁業基地として、栄えてきた。

そして、新日鉄釜石ラグビー部（現・釜石シーウェイブスR F C）の日本選手権7連覇により、ラグビーの町としても知名度が高く、2019年ラグビーワールドカップの開催地の1つにも選ばれている。

私たちの住む白浜浦地域は、釜石市の南東部に位置し、風光明媚なりアス式海岸にある小さな集落で、住民の約7割が漁業を営んでいる、典型的な漁村である。

釜石湾を見下ろす高台からは、東日本大震災（以下、「震災」という）で大津波の到達時間を10分間遅らせたともいわれる、世界最大規模の釜石港湾口防波堤を見ることができる。

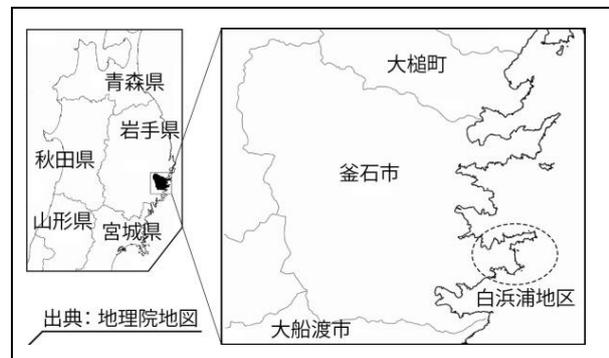


図1 白浜浦の位置

2. 漁業の概要

釜石湾漁業協同組合は平成15年に市内の3組合が合併して発足し、現在の組合員数は正准合わせて449人となっている。

主な漁業は、サケ定置網漁業、ワカメ・コンブ・カキ・ホタテ養殖業、アワビ・ウニ採介藻漁業等である。

合併前の3組合には、それぞれ女性部があって、合併後もおのこの女性部として活動しており、私たちは白浜浦女性部として活動している。

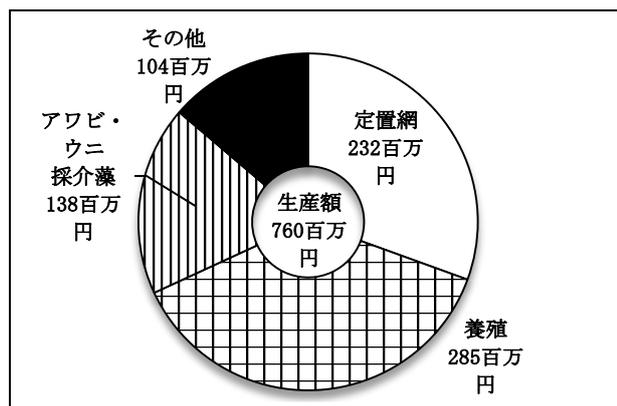


図2 平成29年度釜石湾漁協生産額

3. 女性部の組織と運営

白浜浦女性部の部員数は86人で、役員は、部長、副部長2人、書記、会計、班長10人の計15人で構成されており、組合からの助成金、会費、活動の売上金により運営している。

震災以前の女性部員は103人だったが、17人も減少した。

4. 実践活動取組課題選定の動機

震災では、白浜浦地域も大きな被害を被った。

自宅が流され、引っ越したり仮設住宅に移り住んだ人も多く、地域のコミュニティーは寸断されたようなありさまだった。

震災前の女性部活動は、わかしお石けんの普及活動や海難事故防止運動等に取り組んでいたが、震災後は、誰もが自分のことだけで手いっぱいであり、しばらくの間は女性部活動ができる状態ではなかった。

転機となったのは、県、釜石市等の支援を受けて平成24年から26年にかけて行った、茨城県 J F 大洗町直営のかあちゃんの店、鹿児島県 J F 江口、J F 垂水市および J F 鹿児島市、山口県漁業協同組合長門女性部、株式会社三見シーマザーズ、新南陽マリンレディース等の先進地視察だった。

視察先はどこも、それまで私たちにはとても無理だと思っていた食堂経営や、お総菜の製造・販売を女性部が率先して行っているところばかりで、「女性部でこんなこともできるのだ」と、目が覚めるような思いであった。



図3 海難事故防止運動



図4 大洗町漁協「かあちゃんの店」



図5 江口蓬菜館

「被災した地元をなんとか元気にしたい、そのための活動をしたい」という気持ちで、いろいろと話し合っているうちに、「女性部が、お弁当を作るとかはどうか」「浜料理ならば女性部が集まって出来るのではないか」等、「魚食普及を中心に何かやろうではないか」といった方向性が見えてきた。

視察先で見たような、食堂経営や、大規模な加工品等製造は、自分たちが実際に行うには経費や労働力の面で難しいと感じたが、料理教室や試食会、あるいは小規模ロットの加工品製作・販売等であれば実施可能だろうと考え、新たに始める主な活動方針を次のように決めた。

- ①未利用資源を活用した新たな加工品の開発
- ②試食を通じた地元・他地域等との交流
- ③イベントへ積極的に参加



図6 G活動を開始

この、私たちの新たな活動の名称は、活動内容が魚食普及でもあることから、「魚食普及とグループ」の頭文字をとって、「G活動」と呼ぶことにした。

こうして、平成27年度から白浜浦女性部は、G活動を開始したのである。

5. 実践活動状況および成果

(1) 活動の状況

毎月1回、代表者3人によるG会議を開き、日程の調整や材料調達、調理実習の献立等を協議する。

会議では、交流先や参加イベントの選定、交流会における役割分担等について、毎回熱心な協議が行われた。

(2) 活動の成果

① 未利用資源を活用した新たな加工品の開発

この活動は、低付加価値の規格外品または未利用水産物を利用して加工品を開発しようとするものである。

表1 未利用資源を活用した新たな加工品の試作活動

試作活動	内容
わかめの芯ちゃん	ワカメの中芯を使った佃煮
ホタテのつくね	規格外ホタテを使った焼きつくね
海の幸クリームコロッケ	規格外ホタテを使ったライスコロッケ
どんこのさつま揚げ	エゾイソアイナメを使ったさつま揚げ
アカモク利用の研究	アカモクを使った料理を開発中

まず始めに、当時はそれほど利用が進んでいなかった、わかめの茎を利用した佃煮、「わかめの芯ちゃん」の開発について紹介する。

小売店などでの販売を前提に取り組んだものだが、実際の商品開発に初心者が取り組むのは大変なことで、シール、分量、ネーミング、菌検査等、クリアしなければならない課題が多く、素人同然の私たちだけでは途方に暮れていたことだろう。

幸い、岩手大学や県の職員がそうした課題解決に協力してくださり、手探りではあったが、前に進むことができた。

苦労の末に、なんとか完成した「ワカメの芯ちゃん」を、平成28年3月、東京銀座にある岩手県のアンテナショップ「いわて銀河プラザ」に出展し、試食したお客さまからは好評をいただいた。

次に、ベビーホタテ等、規格外のホタテを活用した、焼きつくねとライスコロッケを紹介する。

地元で行われた食のイベントに女性部として出店し、販売したところ、お客さまから好評をいた



図7 わかめの芯ちゃん

だき、早々に完売した。

これらの加工品を小売店で販売するためには、改良したい点等もあることから、今後も検討を重ねたい。

その他として、最近話題のアカモクを使った商品の開発にも取り組んでいる。

なお、活動に参加した女性部員が、新たな未利用資源を自ら探し、どのように調理するかいろいろと工夫するようになってきたのは良い傾向であると思う。



図8 ホタテのつくね



図9 海の幸クリームコロツケ

②試食を通じた地元・他地域等との交流

この活動は、地元や他地域の方々とはG活動を通じた交流の場を設けることで、「浜が元気になる」ことを期待した活動である。

表2 試食を通じた地元・他地域等との交流

交流活動	内容
J A 栗林支部を訪問	釜石市栗林地区において、地元農協との交流会を実施。
内陸と漁業コミュニティの交流会	白浜浦において、岩手大教授・学生等との交流会を実施。
小学生との調理実習	釜石小学校において、ホタテを使ったつみれ汁の調理実習。
遠野市の婦人消防隊交流会	遠野市において、女性消防隊との交流会を実施。
新人漁業者との交流会	白浜浦において、県外出身の新人漁業者との交流会を実施。
浜の魅力体験講座	漁業就業希望者の体験講座において、料理を提供。
J A 栗林支部を招待した交流会	釜石市栗林地区の方々を、白浜浦に招待して調理実習交流。
J F 久慈市女性部交流会	J F 久慈市の女性部活動を視察、交流を実施。
石鳥谷の婦人消防隊交流会	花巻市石鳥谷町において、女性消防隊との交流会を実施。

最初の交流は、平成28年6月、岩手大学教授、学生たちとともに、地元の山間部にあるJ A 栗林支部を訪問した、山と海の交流会である。交流会では、調理実習と会食が行われた。

私たちが持ち込んだホタテや鮭を使って調理実習が行われ、お互いに良い刺激を受けたことと思う。

また、JF釜石湾では、県内外から募集した漁業就業希望者を受け入れて、漁業を直接体験してもらっており（県が実施する浜の魅力体験講座）、私たち女性部も、新規漁業就業希望者との交流では、食事の提供等で協力した。



図10 浜の魅力体験講座



図11 新人漁業者との交流会

③イベントへ積極的に参加

試作活動や交流活動とも重複する部分はあるが、この活動は、女性部で作った加工品等をイベントで販売し、地元食材に関心を持ってもらおうとするものである。

地元でも、「食のイベント」は年に数回あり、「わかめの芯ちゃん」等を販売しているが、山形県南陽市の菊まつりや、東京の「いわて銀河プラザ」へ出展する機会もあった。

先に紹介したとおり、試作品がすぐに完売する等の効果があった他、最近では、わざわざ女性部のスペースを探して買いに来てくれるお客さまもいるようで、徐々に女性部のイベント参加が市民の間に定着してきた手応えがある。

表3 イベントへ積極的に参加

イベント参加活動	内容	売上額
市内・食のイベント	釜石市内で開催される食イベント（年数回程度）	60～100千円
植林活動における弁当販売	植林活動向けに弁当を製作・販売。	17千円
おいしい釜石コンテスト	釜石市主催のお弁当コンテスト。	—
山形県南陽市菊まつり	南陽市の菊まつりに参加、加工品販売。	12千円
盛岡市ふろしき市	盛岡市のふろしき市に参加し、加工品販売。	10千円

6. 波及効果

「私たちが何をやるのか」「私たちの活動で何を変えられるのか」等の明確な目的意識がなかった中で、平成27年度からスタートしたG活動は、ここまで紹介したように、新商品開発、多数の交流会、イベント参加を続け、いつの間にか、他の地域の方々が、女性

部の交流会やイベント参加を楽しみにしてくれるように変化してきたと感じており、活動の励みとなっている。

また、県、市、漁協、大学、支援団体等が、女性部のG活動と連携して交流活動やイベントに取り組むようになり、「地域全体を巻き込んで浜を元気にするG活動」に発展してきている。

そして、震災直後は、自分たちのことだけで精一杯だったのが、今では「今度はこのイベントでお弁当を販売しよう」「この地区の女性部と交流しよう」等、震災前よりも大きく広がった活動に積極的に取り組み、部員の間には「やる気」があふれ、なんとなくではあるが震災前の女性部が戻ってきたように感じている。

加工品を作っていくためには、営業許可のある施設が必要だが、漁協の協力で、身近な集会施設の内装を改修し、営業許可を取得することができた。このことも、女性部の「やる気」の現れだと思っている。

もしかしたら、今の女性部は震災前以上に、活気に溢れているのかもしれない。

ともあれ、震災後は、多くの人が地元や漁業を離れ、浜の活力は低下してしまったが、私たちの活動が少しでも、浜の元気を取り戻すことにつながったのであれば、喜ばしいことである。

7. 今後の課題

G活動は、他の組織との連携による活動が多くなってきた。

これは震災前には思いもよらないものであったが、地域全体で1つの目標に向かって行動を共にすることが、地域コミュニティの再生というものかもしれないと、最近は思うようになった。

そうであれば、私たちも女性部のG活動に地域全体が関心を持ってもらうよう、これからも努力していかなければならない。

今後の目標として、交流会やイベント参加を継続しつつ、「わかめの芯ちゃん」の改良や、今話題のアカモクによる新商品開発を行いたいと考えている。

そして、これからもG活動を中心とした、さまざまな活動によって大切な地元釜石を少しでも盛り上げ、やりがい、生きがいが育まれるような地元の復興を目指したいと思う。